

ルネッサンス？

橋本和幸

世紀の転回期には、「時代の終焉に当って現われてくる人物」の再生への期待だけでなく、その根底には常に *Wovon Wozu* の課題が、生の問題として、私たちに重くのしかかってくる。そのような現在、生の意味への関心は、その「無意味さ」を前提にして、モデルネへのオプティミズムとペシミズムの間を揺れ動いているようにみえる。しかも、振り子は、後者に傾きがちで。

思潮は、再び過去を現在の照射のもとに置く。そうした点で、今日のルネッサンスばかりにはそれほど驚くこともないのかも知れない。ウェーバー・ルネッサンス、テンニエス・ルネッサンス、デュルケム・ルネッサンス、さらには「まちづくり」のキャッチ・フレーズとしても、ルネッサンスなる語が用いられている。後者はさておくとして、ウェーバー、テンニエス、デュルケムらに付されるルネッサンスは、これら社会科学上の達人たちが、一九世紀後半から二〇世紀前半の近代の成熟期(?)に、近代の、そして近代化の意味を問

うたところに、その特質をみることができ。フィレンツェのアカデミア・プラトニカが、プラトンやプロティノスら古代の哲人たちに関する饗宴の場であり、ギリシャ・ローマ時代の古典の精神にみる自立性の発見の場であったが、同時に一五世紀の終りが、「世界の終り」、「最後の審判の日」の到来、不安と恐怖の時代であったことも、私たちはよく知っている。高階秀爾のいう「光と闇」は、一方でウィーナスを、他方でサティルヌスを重視した「アカデミア」の雰囲気であるが、ニーチェによれば、「浪費があまりにも大きい。蓄積し、資本化する可能性が欠けており、憔悴がきびすを接しておこる……そのような運動の反対者たちすら力を無意味に蕩尽せざるをえなくなっている。彼らもまたただちに憔悴し、使いはたされ、荒廃する」時代、それがルネッサンスなのである。

私は、今年度(一九九二年度)、学部生とシユルター(Carsten Schüter)とクラウゼン(Lars Clausen)の編集になる『ゲマインシャフトのルネッサンス?』(Renaissance der Gemeinschaft?, 1990)を読み、大学院生とはホワイト(Stephen K. White)の『政治理論とポスト・モダニズム』(Political Theory and Post-modernism, 1991)を批判的に検討している。ホワイトは、今日流布されているポスト・モダニズムが、熱狂と不信の渦中にある、という。というのも、

前者はモダニティのドグマから解き放された多様なインプリケーションに由来し、後者はポスト・モダンの思考様式が、時として、モダン故に生じてくる諸問題にかかわることを拒否することから生じてくるからである。私自身は、彼らに肯定的に関与する気持は毛頭もっていないが、ポスト・モダニストたちが攻撃の標的とするモダニティ（モデルネ）とは一体何なのかを問う時、その指向性は、一九二〇世紀の転回期およびワイマールの時代の社会学（者）の一般的傾向の検討と重複する面を多く持っていることに気づく。

西欧近代の初期においては、自律的意志と精神をもった主体の登場、さらには「諸物を合理的に説明せよ」との命令を指摘することが可能であり、また近代の理性指向は人間の様々な意欲の増進を保証するものでもあった。一九世紀になると、確かに理性と意欲の布置は、産業資本主義の出現と成功にとつての必要条件ではあったが、他面では、資本主義は諸物を産出する新たな様式として把握しようというよりは、むしろ、一切の伝統を侵食する合理化の論理が、社会的、文化的生のあらゆる局面に挑戦するものとして、受けとめられるようになる。

西欧近代の特質を、政治的側面に限定して「資本主義と自由主義国家」にみることは、一般にさしつかえないところであろう。さて、ポスト・モダンを主張する者にとつて、この西欧近代に何が、どの程度出現したというのだろうか。ポ

スト・モダンの要請は、近代の社会的・認知的諸構造がもはや新たな歴史的時代に突入したと言いうるほどに変化してきていることを前提としている、と違って間違いないだろう。換言すれば、私たちに周知の社会的・認知的諸構造においては容易に把握しえないような諸現象の出現によって、この近代が引き裂かれてしまっている、という前提である。ところで、ホワイトは、ポスト・モダンの傾向を以下の四点で整理する。一つはメタナラティブに対する不信の念の増大、二つは社会的統合にかかわる合理化の危険性についての新たな意識の出現、第三に新たな情報技術の発達、最後は新たな社会運動の登場。若干補足しておけば、第一の点に関しては、これはリオタールによって主張されたものであるが、今日の世界において科学的・技術的な試みや政治的試みを遂行するに際して、究極の、なんら問題視されえないような正当性の源泉に対して、不信の念が増大してきている、ということ。具体的には、こうした不信の念は、「ムード」として、あるいは「精神状態」（反抗的な精神状態）として、近代の倫理的・政治的省察に対する挑戦となる。

第二については、西欧の近代化や合理化のコストが新たにますます問われ始めてきている、ということ。それは、フリーコーの「ノーマライゼーション」、ハバーマスの「生活世界の植民地化」、リオタールの「パーフォーマティヴィティ」の指摘にみることができる。さらには、「福祉国家」（近代国

家の福祉活動の増大)への多様な批判(コーポラティズム、新保守主義等)を挙げることでもきよう。第三の場合には、かかる情報技術の進展によって、一方では個々人に多様な試みを遂行する能力を与え、ポスト・モダンの段階ではモダン段階よりもっとよくなるであろう、とのメッセージも流されている。しかし他方で、情報技術の発展はビッグ・ブラザーズ的手段にもなりうること、またコーポレート資本主義の新たなイデオロギー装置になりうることも、しばしば指摘されているところである。いずれにせよ、情報革命は、権力やイデオロギー、さらには自由や正義に関する諸問題を考察する際に、複雑な課題を新たに提起することになる。

第四については、西欧産業社会において、新たな価値や新たな社会運動が登場してきていることが挙げられる。例えば、フェミニズムや反(非)核運動、エコロジー運動、民族運動、ホモ・セクシャルやカウンセラー・カルチャーの集団といったものが新たな位置を占めてきている。これらのものは、伝統的なメタナラティブに対する不信の増大ということ以上に、そうすることで将来にむかって活躍すべきよりよいチャンスを獲得しうるのではないか、という新たな方向性を示すものである。

ホワイトが、ポスト・モダンの問題性としてここに挙げるそれぞれのものは、別に目新しいものではないが、彼が「伝統的モダニティがその重要性(意義)を失なっているという

ことでなく、ポスト・モダンのモダニティは、こうした伝統的モダニティとの関連性を問うものでなければならぬ」と述べる時、私たちは、ポスト・モダンの問題性ではなく、モダニティそのものについての省察を一層すすめるという作業に着手しなければならないだろう。

尚、ホワイトは、ポスト・モダニズムについて筆をすずめるに当って、フーコーとデリダらのポスト構造主義ないし脱構築主義の検討から始めているが、フーコー、デリダに関しては、ハバーマスは、アンチ・モダニズムの流れに位置づけていることは、周知の通りである。未完のプロジェクトとしてのモデルネに批判的(啓蒙的)にとどまるハバーマスは、「近代世界からも飛びたして」しまうこれらの人物に対しては、ニーチェ・ルネッサンスに連なるものとして、非常に厳しい評価を下している。

一九八七年の第三回テンニエス・シンポジウムは、『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』(公刊一〇〇年を祝して、キールで開かれた。『ゲマインシャフトのルネッサンス?』は、シンポジウムでの諸報告に新たに教本の論文を加えて編集されたものである。一九世紀ドイツとしてワイマールの時代の政治的・文化的背景のなかで、同時代人(特にウェーバー)の知的活動とダブらせてテンニエスおよびゲマインシャフト概念を考へてみる時、示唆するところ多い論文集である。そ

して、この点は、無限背進（有限前進ではない！）の永遠回帰でもなく、またこのわれわれなる世界から未来へ向って飛び出すことでもなく、この近代に踏みとどまろうとすることを義とするなら、ゲマインシャフトは古く、ゲゼルシャフトは新しい、とは違った地平で、ゲゼルシャフトの内にあるゲマインシャフト（ゲマインシャフト概念からのゲゼルシャフト批判）に注目するのも、今日おおいに意義のあるところと考えられる。

ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの両概念については、社会学の立場からはテンニエスによる意味づけがとに有名であるが、この両概念はかつては同義語的に用いられていたが、ドイツの歴史のなかでそれ以降多様に用いられてきており、特にテンニエスの二分法を理解しようとする場合、歴史哲学的、文化批判的に厳密に検討することが急務となる。さらに、一八四〇年以降のドイツの社会運動は、マルクスを通じてテンニエスに大きな影響を与えることになった。（この間の事情については、マルクスによる概念との異同をも含めて、詳細な言及が必要であるが、ここではその任ではないので触れない。）シュルターとクラウゼンは、「テンニエスは、当時成熟しつつあった問題を解決しようとして、かかる問題の源泉を正確かつ包括的に認識することに意を注いだ。その際ロードベルトゥスの批判によって修正されながらも、バツハオーフェン、モルガン、ギールケといった人たちの『ゲマ

インシャフト』の歴史的把握を、『ゲゼルシャフト』の現実的再生産や生産というマルクスの研究に関連づけようとしたのである」と言う。さらに、「初期ロマン主義（原文ゴチ）が政治的に明確化し、力強く時には不安をかもしだすものと考えた真正ゲマインシャフトについての問は、そのままの形で今日にも言えることなのである。例えば、友愛（Brüderlichkeit）といった人間社会に基本的な問題は、歴史的には相当古いものであるが、それは、私たちが今日啓蒙化された社会（ゲゼルシャフト）とかその計算合理的意志形態とかと呼び慣わしている思潮と、イローニッシュにはあるが、同じ流れに注がれているのである。即ち、かかる問題は、まさに時代のデルタのなかで、いわゆるポスト・モデルネのなかで、いま尚相変らず設定されるものなのである。そして、このポスト・モデルネは、実のところ一切のモデルネを規定しつつきてきている、憧れと冷静さという二つの態度のディレンマから脱することはできないものである」とも述べている。

若干引用が長くなったが、ここでの主張が、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの両概念の歴史的整理の必要性、ならびにモダンにつづくポスト・モダン（実はモダンのなかのポスト・モダン）の問題性を指摘していることは明らかである。この二つの点は密接に関連するものであり、この検討は緊急を要する課題であると考えられるが、同時にいまひとつ、テ

ンニエスの時代（ワイマールの時代とするなら、テンニエスの問題はウェーバー、ジンメルにもかかわってくる）に、ゲマインシャフト概念が、彼の主張とは別のところで用いられていたことにも注意しておく必要がある。

一九二九年十二月十六日付のテンニエスのフィアカントへの手紙で、彼は次のように記している。「私は、この五〇年間以上にわたってひどく孤独の道を歩いてきたし、また終りにいたるまで、このような道を歩いていくことで満足するしかない」と。当時七十四才の彼は、なぜ「ひどく孤独」であったのだろうか。一年後の一九三〇年、テンニエスは、ネルソン（Leonard Nelson）の回想録のなかで次のように述べる。「古代にもまして「今日」、知識と科学的思考が信仰の十分さや妄想に替って力強く現われてきている。神々や超自然的諸力は消滅してしまっている。これらのものは物語や詩的ファンタジーの王国のなかで美的価値をもって現われてくる。だがしかし、未曾有の戦争期にその因がある混乱状態のなかにいる人々が、あたかも科学的で、しかも批判と補完としての学問を通して可能となる哲学的思考を破壊し、またそれに取って代りうるかの如くに古き理念世界を救いだし、再び構築しようとするために、過去二世代以上に大胆にも意気揚々としているのはどうしてなのか、ということを考察しなければならぬ時が、将来きつと来るだろう……」。ここには、ワイマール期において、一見真正ゲマインシャフトに忠

実であるかの如く、しかしその実、ゲマインシャフト概念を青年運動に都合よく曲解して誤用していることへの、テンニエスの歎きが聞こえてくる。相反する二つの規準概念の不当使用は、やがて、ゲッペルス派による誤用を通じて、ナチスの民族ゲマインシャフトを結果することになる。

シュルターとクラウゼンは、ここにテンニエスの悲劇的運命をみる。テンニエスは、カイゼルの治下だけでなく、ナチス・ドイツのもとでも、自己の生の最後まで毅然としていた。彼は、時代の思潮に生を賭して耐え続けた。この悲劇的運命は、テンニエス個人という以上に、ゲマインシャフト概念に因ると言ってもよい。擬似ゲマインシャフトは、表面上の静寂さを主張するものであり、虚構であるが故にそれだけ内容（実体）を求める要求は強く、そのために独特な教育形態と通過儀礼を遂行することで、一層非合理的な装いをまとった学説への水路を開くことになった。その意味で、擬似ゲマインシャフトは、自律的な理性から誕生したものの、非合理性を一層増大させるものであって、この非合理的なものはモデルネの曲解であり、凡そゲマインシャフトの精神などではありえない。

世紀の転回期に、ゲマインシャフト概念は、政治的・社会的にドイツでは特殊な役割を担うことになった。ビッケル（Cornelius Bickel）によれば、この概念は、モデルネからの現実逃避主義の兆候を示すものであり、「テンニエスは、彼

の概念の批判的・理性的意図にも拘らず、ワイマール期のロマン主義化された、ネオ保守主義的潮流に最後まで抗することはできなかつた」のである。ビッケルは、ここに社会的ペシミズム (Sozialpessimismus) をみ、さらにドイツのこの時期の経験的個別科学としての社会学の展開は、ペシミズムの問題と確実に結びついている、という。この時期、「経験への指向は、歴史の総体性の意味を問う歴史哲学的信奉を断念することになる」。ビッケルは、自由主義的オブティミズムの立場をヘフディングにみ、そこではモデルネはヒューマニズムの過程となるとするのに対して、ペシリストであるテンニエスは、モデルネをあえて危険を冒すこととなる、ヨーロッパの歴史の極端な一回きりの実験と考えていた、と言う。

七〇年代のニーチェ・ルネッサンスを含めて、ウエーバーやテンニエスらのルネッサンスに言及するのは、モデルネへの懐疑、自由主義的価値体系の危機下における偉大な個人の「耐える意志」を強調することとなる場合がある。ウエーバーもまた、英雄的ペシリストと呼ばれることがある。一九世紀の暗鬱と憔悴の時代をニヒリズムへと至るペシミズムにみ、ルネッサンスの時代に似ている、と言ったのはニーチェである。

では、二十一世紀への転回期、ルネッサンスの声高な主張は、いまを生きる私たちにとって、何を問いかけているのだ

ろうか。闇から光へ。

引用・参考文献

- White, S. K., *Political Theory and Postmodernism*, 1991.
Schüller, C., Clausen L., Anfragen bei »Gemeinschaft« und »Gesellschaft«, in: *Renaissance der Gemeinschaft?*, 1990.
Bickel, C., "Gemeinschaft" als kritischer Begriff bei Tönnies, in: *Renaissance der Gemeinschaft?*, 1990.
Nietzsche, F. W., *Der Wille zur Macht*, 1901 (原佑祐、一九六七年、河出書房)。
高階秀爾『ルネッサンスの光と闇』一九八七年、中央公論社。
(はしもと・かずゆき 金沢大学文学部教授)